

「創立50周年の節目を振り返って」



宇治電化学工業株式会社

執行役員 川村 進一氏

あけましておめでとうございます。今年も労務管理者協議会の運営にご協力をよろしくお願いいたします。昨年、当会は創立50周年の記念行事として研修旅行と来賓・OBの方の出席をいただき懇親会を開催することができました。幹事長として、コロナ感染が収束しない中ではありましたが、皆さまのご理解・ご協力を得て50周年という節目を迎えることができ感謝とともに安堵しております、ありがとうございました。

そこで今回は、50周年記念事業の研修旅行がとても印象深いものでしたので振り返ります。東北の震災地などを巡る研修旅行は防災対策やBCP対策の参考にするとともにその重要性を再認識することを目的に行いました。被災地の実際の状態などを見ると、自然の猛威のすごさ、その前では人の力はいかに無力であるかを実感した旅でもありました。一方で、10年近くたったなかで人間のたくましさや復興のたくましさを感じることも多くありました。

被災地の当時の状況を保存した記念館巡りでは、胸を締め付けられる思いがあったのは参加者全員同じだと思います。その一方で、復興に向けての再整備が着々と進められていたり、区画整備が完了してたり…、津波被害のため、ここまでは住宅はダメと徹底した行政の指導の下、整備された姿は地域の復興への決意を感じました。

不謹慎かもしれませんが、被災した建物を遺産として残し、その被災の伝承するための施設の見学を行った一方で、その敷地のすぐ隣では、(当然ながら)津波の被害想定のため建物(特に住居)はない中で、パークゴルフ場が整備され、そこで地域の住民の方がグループで興じている。みんな、歓声をあげつつ、楽しそうにしている。私は施設を見学し沈痛な気分で一歩外へ出て、その光景を見るに、10年の年月があるのは理解するのだが、人の営み、人の生きていく強さを強烈に感じた。また宿泊施設で、少しばかりの宴会を行ったのだが(十分な感染対策のもと)、そこで働くウエーターの若い方と話をする機会もあった。「小学生の時に被災して、家族や親類を亡くした、あるいは行方不明のまま人もいる。でも地元が好きで離れたくなくて、ここで働けていることがうれしい。また、こうして来ていただき、楽しんでいただいている皆様を見て、私もうれしい…」というのをしっかりと前向きに話をしてくれた。お酒を追加注文したのは私だけではなかったはず。10数年の時間があるから、と言われればそれまでなのだが。被災地を見て回り、タイムスリップして震災を感じたものにとって、地元が好きで、そこで生活をしていくことを選んで歩みを進めている方々の人としての強さに心を揺さぶられた。

「夏草や兵どもが夢のあと。」松尾芭蕉の句。昔、奥州藤原氏の栄えた所だが、滅んでしまい、夏草(自然)と比べると、人々の営みのはかなさを詠った句。今回はその真逆。自然の前では人は弱くはないけど、人々の営みはそれをも受入れ着々と前に進む強いものである、と感じたこの50周年の研修旅行でした。

